

## 1-1 広葉樹林を評価する意義

齊藤 哲

森林総合研究所 関西支所 (現 企画部)

日本の広葉樹林の有効活用の可能性を検討するため林分構造が複雑な広葉樹林の生産コストや資産価値の推定を試みました。これまであまり評価されてこなかった適正な生産コストや資産価値を知ることが、有効活用を考える第一歩になると考えています。

 日本の広葉樹・広葉樹林

日本の森林面積の約半分が広葉樹林で、蓄積では15億 $m^3$ 以上の資源量があります。しかし、国内の素材生産量のうち広葉樹の占める割合は約1割に過ぎません。広葉樹の製材用素材(以降、用材)は高値で取引されることもありますが、生産された広葉樹素材の9割以上が安価なチップとなり、広葉樹林は価値が低いとみられています。広葉樹はチップ以外の用途にももっと使えるはずですがその価値が十分評価されていません。また、日本で使われる広葉樹の8割は輸入品ですが、年々輸入量も減り、国産化の期待も高まっています。

本冊子では日本の広葉樹林を木質資源としてもっと有効に活用できないか今一度考えてみます。

 広葉樹の有効活用にもむけて

広葉樹林の有効活用には、いくつか課題があります。森林総合研究所ではその課題について、山形県、島根県と共同で交付金プロジェクト「広葉樹利用に向けた林分の資産価値および生産コストの評価(R2～4年度)」を実施しました。この冊子ではその成果をご紹介します。

本冊子の構成は以下のようになっています。

- 2章 広葉樹林を空から把握する
- 3章 広葉樹林の生産コストを推定する
- 4章 広葉樹林の資産価値を推定する
- 5章 広葉樹林から通直な用材を採る
- 6章 広葉樹の価格の動向を調べる

コラム

まず、広葉樹林がどこに多いかを知る必要があります。広葉樹資源量を把握するのに空からみた情報を使いました。それを第2章で説明します。ここでは広域的な資源量を広葉樹天然林の多い東北地方と

広葉樹二次林の多い近畿中国地方について比較しました。

広葉樹林施業を行うには、生産コストがいくらか、それに見合う価値があるかということが重要になります。生産コストについては、広葉樹は分枝が多く、作業も複雑なためこれまであまり調べられていませんでした。第3章では開発した生産コストの推定方法について説明します。

また、広葉樹林は、樹種やサイズがばらばらで、利用方法が明確な針葉樹人工林のように簡単には価値がわかりません。第4章では広葉樹の原木価格を樹種ごとに調べ、多様な広葉樹林のポテンシャルの価値を推定しました。

広葉樹林の価値の推定にあたって、サイズや樹種の多様さ以外にもうひとつ問題があります。それは、広葉樹は複雑な樹形のために利用できる量がわかりにくいということです。第5章では一本の木から木質資源として利用できる量や、用材が多くとれる条件を調べました。

全国の平均的な原木価格を第4章で調べましたが、バラツキも大きく、様々な条件で価格は異なります。第6章では用途や時期などによる価格の違いを調べました。

広葉樹林を有効活用するには、他にも様々なことを考える必要があります。トピックとして、海外産の広葉樹製材品価格の動向、循環利用に関係する萌芽枝の機能、さらに実際に広葉樹林を有効活用している事例についてコラムで紹介いたします。まだまだ課題は多いですが、活用されていない広葉樹林が豊富にある地域や、広葉樹製品のニーズの高い地域では、広葉樹林施業も選択肢のひとつとして考えてみられるとよいと思います。やり方次第で広葉樹林を十分活かせるかもしれません。その第一歩として、広葉樹林の適正な価値や生産コストを理解しておくことが重要です。